
二槍の使い手

エクスタシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二槍の使い手

【Nコード】

N7827Z

【作者名】

エクスタシー

【あらすじ】

ある小さな村に用心棒がいた。ある日、その村が悪魔に襲われ…。

プロローグ（前書き）

駄文です。矛盾しているところはご都合主義ってことで。

プロローグ

??? side

俺の名前はビスマルク・ミランドラ。小さな村の用心棒だ年は25。19の時に盗賊によって親を亡くし、親を殺した盗賊を返り討ちにしてから自分を鍛えて用心棒となった。武器は長槍と短槍という変わった得物だが一番しつくり来たのだから仕方ない。用心棒になった理由は親を殺した盗賊みたいなやつらからせめて村だけでも護りたいという思いからだ。しかし、それもすべて今日で終わりだ。村に悪魔のような者達が押し掛けて来たのだ。当然、俺は迎え撃った。自分はそこの傭兵では敵わないと自負している。だから大丈夫だろうと思った。その隙がいけなかったのかもしれない。悪魔は俺を一撃で倒し、俺の住んでいる村を今も襲っている。まるで、村丸ごと存在を消すかのように。

存在が、この世から自分という存在が消えて行くかのような感じがした。

また、だれも護れずに。

でも、護ることも不可能。

するとどこからか声が聞こえてきた。

——貴方は生きたい？そして護りたい？

誰？生きたいよ。そして護りたい。

——じゃあどうして護らないの？生きることを諦めてるの？

だって…体に力が入らないんだよ。だから、不可能だ。

——じゃあ力を貸してあげようか？

良いの？ホントに俺なんかで良いの？

——良いよ。君は気に入ったし。

じゃあ、力を貸してよ。護るための力を。

——うん。これで契約は成立した。

その瞬間、身体の中に温かな感覚が入ってくる。元々俺の中に入っていた何かが、それによって流されていく。それは人として、俺であるための大切ななにかで、人が人であるのに決定的なものだったように感じたが、不思議とそれが流され、消えていくことに不安や畏怖は覚えなかった。

その後、そこから溢れるように流れ出て来たものは今まで感じた事のない、いや、感じることの出来なかったなんとも言えない感触。俺が自身に起きた出来事とその違和感に戸惑っていると、さっきの聲が俺に言ってきた。

タクーシン《私の名前は霧海の氷雨タクーシン》

その声は俺のの胸元から聞こえてきた。もう俺の頭は今何が起きているのか分からず、混乱していて考えがまとまらない。だが、それでも分かることは一つだけあった。

ビスマルク「生きて……いる？」

頭が動く、手が動く、足が動く。俺は倒れていた場所からゆっくりと起き上がると、煤けた自分の姿を見て確信した。あんなに重く、

動かなかった身体は朝目覚めたばかりのように軽く、悪魔に襲われたときの傷も、布地が破れているものの、流れ出る筈の深紅の液体は出てない。

タ《さつき言っただしょ。力を貸すって》

ビ「貴方は……何者だ？」

タ《それもさつき言った。私の名前は霧海の氷雨タクーシン。紅世の王よ》

俺はその声の主を見つけようと周りを見渡す。でも周りにあるのは悪魔が村を襲った残骸のみ。

タ《私を探しているの？私はあなたの胸元のペンダントよ。それは私の意思を表に表すものでしかないけどね》

その声につられて胸元を見る。するとそこには十字架のペンダントがあった。

タ《……どうやら、事の元凶がこちらに気づいたらしいわ。でも大丈夫よ。今のあなたの力でも十分に対処できるわ》

ビ「元凶って一体……」

悪魔「おいおいおい！何か違和感があるなと思って戻ってきてみりゃ、フレイムヘイズじゃねえか！残念だったな。さつき皆食っちゃったぜ」

俺はその声にハツとなり、胸元のペンダントから目を離して前を見

る。そこには俺を倒したあの悪魔が、こっちを見て笑っていた。

悪「しかもお前、最初に倒した奴？こりゃ傑作だ！わざわざ俺の手柄を増やしてくれるとはありがたいぜ！」

悪魔は俺に向かって手をかざす。

悪「こんなのに俺は名乗る必要はねえな。さっさと失せな、フレイムヘイズッ！」

悪魔が叫んだと同時に、俺にかざした手のひらからあり得ない色の炎が現れ、矢のような速さで私に向かって放たれた。

ビ「そんな…」

無理だ。こんなの、当たったら死ぬ。

俺はすでに悪魔の姿を見つけた時から、恐怖で動かない。さっき悪魔に殺された時の感覚が残っているのだ。

ビ「（また、殺されるのか？せつかく生きると、生きて護ると誓ったばかりだったのに）」

鮮やかな緑色の炎弾が、とてもゆっくり進んでいるように見える。今度は本当に死んでしまうかもしれない。今までのものは全て夢のように儚く消え、この炎弾が俺に当たった瞬間目が覚めるかもしれない。そして、目が覚めた先は天国か。それとも……。

ビ「嫌だ！俺はもう何も護らずに死ぬなんてことはしたくない！」

心の叫びは、いつの間にか声に出ていたようだ。炎弾に訴えるかのような俺の叫び声が、周りに響く。そしてその声に反応するかのように、薄い青色の炎弾が目の前を照らした。

悪「な！その炎の色は、霧海の氷雨タクーS」

悪魔が話せたのはそこまでだった。俺の放ったと思われる炎弾が悪魔を包み込んで悪魔が塵になったからだ。

ビ「か、勝った？死んで…ない？」

タ「大丈夫よ。それよりもこれからどうするの？貴方がフレイムヘイズになった瞬間から貴方は人々の記憶から消えたわよ」

ビ「あ、ああ。そうだな。まずは俺の役目を教えてほしい。用語なども全部」

そして俺はそれから数時間、タクーシンからいろいろなことを聞いた。

プロローグ（後書き）

オリキャラの名前は辞書に載っていた名前を頂戴したものです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7827z/>

二槍の使い手

2011年12月25日08時50分発行